

海外林業研究会々員の広場

嫌われても国際協力（1） 留学や研修について

熱帯林の持続的な利用には、長期的な視野と広い範囲（地域的にも分野的にも）での活動が必要です。長い期間そして広い範囲の活動を実施していくには、みんなで力をあわせる必要があるのは、言うまでもないことです。国際協力の現場では、自立心をもってもらうために、相手に厳しいこと言わざるを得ないこともできます。これが「嫌われても国際協力」とした真意です。

初回は日本への留学や研修について、その例を取り上げてみたい。

「日本に留学したいんですけど、どうすれば良いですか?」、何度きかれたことだろう?

「とりあえず、今まで何を研究してきたか、日本で何をどこまで、そしてどのように研究したいかを英語でまとめてきて下さい。それを見て、日本の大学で受け入れてくれる先生がいるかどうか考えてみますから。」と答えるだけで、問い合わせしてきた人のほとんどはその後、留学の相談に来ることはありません。

やる気を見せて履歴書、業績目録、希望する研究テーマ等を持ってくる人は少数派です。でも、持ってきた資料をみて、

「うーん、貴方の研究テーマにあう大学の先生に心当たりがないんですよ。」という、「私を受け入れてくれる先生がいるなら、研究テーマを変えても構いません。」

などと、私をがっかりさせる答えが返ってきます。そしてついつい、

「今まで研究してきたことから離れて、一からやりなおすのですか?」

「それでなくても言葉が違って大変なのに、専門外のことを日本で学ぶというのですか?」

「一体全体、貴方は何のために留学しようと思うの?」

「答えなくていいよ。でもこれだけは覚えておいて、『留学するためには研究テーマを変えても良い。』って言った貴方を、僕が日本の大学の先生に紹介することは絶対無いってことをね。」と大説教をしたことすらあります。

このように、どうしても目的を明確にできない人には、自国でさらに勉強せよとか、厳しいことも時には言う。そうすることがその人に自立心を与え、長い目で自国の自立に役立つ人材を育てるための協力であると考えからです。

発展途上国支援の一環としての日本への留学生受け入れ増が報じられる度に、上のような記憶が頭をよぎります。総枠が増えたがために、学習目的無しに留学する学生が増え、受け入れた大学の研究室では、そのような学生の指導に時間が割かれ、まじめに学ぼうとする学生達への指導がおろそかになる。書きすぎのような気もしますが、実態に近いこともあると思います。受け入れる日本側も、組織のしがらみはあるにしても、指導できないなら指導できないとはっきり断ることも必要ではないでしょうか。

日本全体での留学生受け入れ枠、選考方法、その他の制度は、私の意見で代わるものではありません。私にできることといえば、本当にやる気も能力もある人を、その人を伸ばしてくれる人に紹介することくらいです。

（藤間 剛，CIFOR 研究員）